

## 『YELL (エール) …』

明星学園 宮下 智

Jさんが進行ガンと闘っている。睾丸ガンを切除したのは昨夏のこと。無事に患部を取り去ることに成功したのだが、起こるはずのない下肢の運動障害が術後生じて、車椅子生活となった。ピョコン、ピョコンと不随意にしか動かない足を前にして、本人もショックだったのだろう、うなだれ、伏し目がちに、暗い表情をして居室に籠る日が続いた。職員を呼ぶことも遠慮して、排泄の失敗も相次いだ。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

Jさん、元強度行動障害者。重度知的障害、自閉症を併せ持つ。発語なし。大声、常同運動、強度の偏食あり。物の位置、カタログ、電話帳、広告用紙、看板、観光バス、衣類、職員の退庁時間、ゴミ等に強烈な強迫反復行動あり。もう明星では、死語なのだが、いわゆる『こだわり』ってやつ。

Jさんには、こんなレッテル貼りのような紹介で、大変申し訳ないのだが、二十年前の彼の大変さを手っ取り早く分かってもらうのには、世間的には、これが一番早いのだろうと思う。

二十年前、彼の採血には屈強な男性職員三名が必要だった。歯医者だってもちろん全身麻酔。レントゲン、脳波検査は、検査室入室までが、限界だった。入ったかな、と思ったら飛び出してお仕舞い。

数センチの切り傷を負って、通院した時には、麻酔を打つどころではなくて、職員、看護師さん方が抑え込みの中で、そのまま麻酔なしで、縫ったことを思い出す。しかしその糸も、帰園すれば、自分でちぎって取ってしまうのだった。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

それから二十年、Jさんの頑張りや職員の頑張り、そして家族の応援、三者のコラボレーションの結果がJさんをすっかり変えていた。

点滴注射は、看護師さん一名でOK、針先が見えないように保護はするが、何時間にも渡る点滴の時間も腕を動かさそうとも、もちろん針を抜こうともしない。レントゲンもCTもOK、微動だにしない。このセルフコントロール力、これがこの二十年でJさんが、皆と一緒に手に入れたものだ。

Jさんが何を感じ、何を伝えたいのか、何をしたいか、何をしたくないのか、伝わらない度に反復強迫行動に走り、職員と格闘し、本当の気持ちが伝われば、身体が止まるというようなことを繰り返しながら、一人ぼっちの寂しさと苦しさの世界から、一步一步皆と一緒に安心の世界へと歩いてきたのだ。

セルフコントロール力は、彼にとって決して鍛錬の結果ではない。見守ってくれている人がいる、こんな僕でも分かってくれる人がいる、だから頑張れる。その結果、手に入れたものだ。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

引き籠りがちな彼に職員は声をかける。「確かに、歩けなくなったことは悲しいことだよ。こんなはずじゃなかったものね。確かに歩けないことは、不便なことさ。ついこの間まで、Jさんは、どこへでも自由に歩いたり走ったり行けたんだものね。でも歩けないとか、歩けるとか、それは、そんなに大事なことはない。車椅子のI子さんや目の見えないS子さんやK子さんのこと、Jさんも良く知っていると思うけど、職員の付き合い方は、車椅子じゃない人や、目の見える人と何か違うところがある？…、そう、ないよね。ここでは、歩けるとか歩けないとか、目が見えるとか、目が見えないとか、しゃべる、しゃべれないとかで、おつき合いの仕方は何にも変わらないんだよ。それを一番知っているのは、ここでずっと暮らしているJさんじゃないか。できなくなったことが増えたことは、悲しいことだけど、できなくなったところは、助けてもらえばいいんだよ。またこれからはずっと一緒にやっけて行こう。」

Jさんは、次第に車椅子を上手に扱うようになり、数ヵ月後には、F1レーサーのように車椅子をブツ飛ばした。そして、助けて欲しい時に職員を呼ぶのがとても上手になった。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

そんなJさんに、この春になって、ガンのリンパ節転移が見つかった。恐れていたことが現実となったのだ。開腹手術か、抗がん剤治療か、ぎりぎりの相談が続いた。転移巣の大きさは、2.3センチ、リンパ節郭清手術のマニュアルでは、その大きさの上限は2.0センチ。一方、抗がん剤治療は五日連続の点滴作業、もし抗がん剤点滴の途中で液漏れがあったら、腕が腐ってしまうという…。結局、どちらの可能性も探りながらのS大学病院への入院が決まった。自宅から高速で一時間半。皆が複雑な気持ちだった。

『神様はどうして、こんなにJさんを苦しめなきゃいけないんだろう？せっかく行動障害を克服して、Jさんの幸福はこれからだという時に。一回ならともかく、二回、三回は無いだろう』と。



Jさんの入院の予定は、クラスの仲間にも伝えられた。

クラス中が騒然となった。(ことわっておきますが、クラスのメンバー二十名のほとんどが、発語を持たない重度精神発達遅滞の方々です。)

児童入所施設A学園以来の同期のK・Mさんは、昼、夕の二回のてんかん発作。話をしていくとJさんの入院の件で、しっかりと目が合う。同じく同期のY・Rさん、血便が出る。やはりJさんのことで視線が合う。相談する中で、一緒に写真を撮って、応援の手紙と一緒にJさんにあげたいとのこと。一緒に写真を撮りたいとJさんに告げると、Jさんからは「アウ」の返事。良い写真が撮れて、「はやくもどってきてね」「がんばってね」の手紙とともにJさんの手元に。これでMさんのてんかん発作もRさんの血便も止まった。

Y・Kさんは、普段は一台しか持たないキーボードを、両手に一台ずつ計二台持って歩くようになった。自転車に乗る時には、前のカゴに一台、後ろのカゴに一台乗せている。そして、入院に出かけて行ったその朝には、玄関の椅子の上にキーボードが二台並べて置かれていた。おそらく「いつも一緒だよ、がんばってね」の気持ちがこの二台一組のキーボードには込められているのだろう。「Yさん、Jさんのこと応援しているんだよね、ありがとね」の職員の声かけに、Yさん、とっておきの笑顔を返してくれる。

I・Kさん。Jさんに応援の手紙を書きたいと、紙をペラペラ触ることで教えてくれる。Kさんの手紙は、魚の絵、大きな魚の絵を何枚も何枚も描いて、Jさんに持参した。一枚ずつ絵を渡すKさん、Jさんは、それをまた一枚ずつ両手を合わせてもらっている。Kさんの魚の絵は、スイミーの絵本の魚のイメージ、つまり『仲間』の意味。「ずっとずっと仲間だからね」と手紙を渡すKさんに、一枚ずつ両手を合わせて「ありがと、本当にありがと」とそれをもらっているJさん。支援に当たった職員はその情緒交流の光景を見ていて、鳥肌が立ったような…。

S・Yさん。Jさんの通院帰園後に連続的な弄便、脱衣、大声。そして童謡の『さっちゃんのうた』を良く歌う。Jさんのこと心配？と尋ねると大きくなづく。手紙を書いて、写真を撮って、寄せ書きのようにして、Jさんに持参。『さっちゃんのうた』の三番は、遠くへ行っちゃうてほんとかな？さびしいな、ですよ。

そしてM・Kさん。何日も迷ったあげく手紙を書くことにする。それまでは、大声や反復的な質問が続いている。JさんとMさんは実は同じ担任、Mさんの心の奥には、Jさんの病気を強く心配する担任に対する妬みの気持ちもちょっとあり、それがおそらく手紙を迷っていた原因。なかなか自発的に手紙の文章なんか今まで書くことができなかった彼女がすごい勢いで書いていく。(スタートインター！)(いんさつです！)(でーかいおおきなはんかちょう！)(ラミネーターまち！)(でーかいおおきなはんかちょう！)(スタートインター！)(いんさつです！)文章の横には、黒い三つ目小僧と戦う女の子の姿が描かれている。

さすがにこれには、通訳が必要ですよ。では、こんな通訳はいかがですか？『Jさんへ、もうすぐ入院スタートだね。私は学園で待っているよ。大きなハンカチじゃないと涙がふきとれないくらい悲しくなります。Jさんの中の悪い奴、私もやっつけるの手伝います』

皆の心強い応援をもらって、Jさんは今でも、ガンと闘い続けている。

WELCOME TO SATORU WORLD

知的障害入所施設明星学園における心のケア

<http://homepage3.nifty.com/myojo-satoru/>